

「あ」系感動詞の意味用法について

姚瑤

日本語では、母音「あ」のみで構成される感動詞が豊富である。これらの感動詞は発音が同じであるものの、音調、音節数などの違いにより、様々な意味用法を持ち、それぞれに共通点と相違点があるので、語の認定が非常に困難である。本稿では、このような感動詞の類を「あ」系感動詞」と称し、それに属される個々の感動詞の意味用法を整理し、語の区分を行い、その中核的な用法と周辺的な用法を分別することを目的とする。その上、情報処理システムの観点から、「あ」系感動詞間の関連性を明らかにしようとする。

研究方法として、本稿では日本語日常会話コーパス（モニター公開版）を利用し、コーパスから「あ」系感動詞の例文を抽出し、文脈と音声の両方から分析考察を行った。

その結果、次のような結論が得られた。

- ①「あ」系感動詞は「あ」系感動詞は形式の違いと各意味用法の独立性の観点から、「気づき」の「あっ」、「呼びかけ」の「あっ」、「情報受容」の「ああ」、「躊躇い」の「ああ」、「感嘆」の「ああ」と「残念・不満」の「あーあ」の六つの独立の語に区分することができる。それぞれの語に周辺の、派生的な用法がある。
- ②「呼びかけ」の「あっ」を除き、「気づき」の「あっ」、「躊躇い」の「ああ」、「情報受容」の「ああ」、「感嘆」の「ああ」と「残念・不満」の「あーあ」はすべて情報処理システムに位置づけられ、それぞれ「情報遭遇」、「情報処理」、「情報受容」と「情報判断、評価」のプロセスに対応する。